

## 幕末・明治期の横浜のフランス人企業家 アルフレッド・ジェラルドについて

西 堀 昭

### (1) はじめに

幕末の開国直後から明治時代にかけて横浜に多くの外国人がどっとやって来てさまざまな外国の文化をもたらした。幕末の文久年間に横浜にやってきて、帰国まで横浜に滞在したアルフレッド・ジェラルド (Alfred Gérard, 1937-1915) もその一人であった。彼らは外交官、宣教師、軍人、商人、教師、あるいはまた観光客であった。

その中には自分で事業を起した外国人もいた、その一人がジェラルドである。彼は西洋建築に目をつけ、建築資材であるレンガやカワラに着目した。もちろん、最初、それは外国人の住居のためであって、横浜に古くから住んでいる日本人のためではなかった。しかし、ジェラルドの新事業は成功を約束された。開港間もない横浜に西洋建築資材の需要は当然のことながら大きかった。西洋建築は市内の教会<sup>1)</sup>、外国人向けの劇場<sup>2)</sup>、ホテル<sup>3)</sup>などに広がっていった。その建築資材に不可欠なのがレンガや西洋カワラであり、こちらの方は市民の住宅でも使われた、この名前のような姓をもつジェラルドとはいったい何者なのか。

この謎の人物に最初に興味を持ったのは研究者ではなく、かつての横浜市長飛鳥田一雄氏<sup>4)</sup>である。市長は、多忙な公務のかたわらジェラルドについて資料を集められ、1974 (昭和49) 年に一冊の本『素人談義三人ジェラルド』(有

隣堂)<sup>5)</sup>を世に出した。かれこれ40年も前の話である。この企業家ジェラルドを研究の対象にした研究者はいなかった。

この本は、40篇のさまざまな単文が収められている随筆集であるが、その最後を飾るのがジェラルドの話である。この本全体は192頁で、そのうち33頁にわたり「ふらんす瓦の謎」が書かれている。最後の文章のタイトルが表題になっていることや分量的に見ても飛鳥田市長がかなり力を入れて書いたものであることがわかる。これによって初めてジェラルドなる人物が幕末から明治にかけて横浜で活躍したことを知った市民もいたに違いない。外人墓地下のプール入り口近くにあるジェラルド・レンガ・カワラ工場跡の記念碑にもそれほど関心を示さず、近くに住む市民は、元町公園近辺の散歩のときジェラルドのカワラやレンガの上を、それと知らずに歩いていたのである。

飛鳥田氏が注目した頃は未だ研究者も皆無で、ジェラルドの生没年も、また彼がどこから、何をしに日本へ来たのか全くわかっていなかった。幕末の開港間もない横浜に一人でやってきた企業家ジェラルドとは一体何者なのか。横浜に腰を落ち着け、蒸気機関などを利用して近代的レンガ・カワラ工場を経営したジェラルドは、近代の横浜を形造った外国人の一人として忘れてはいけないのではないのか。開国後の横浜の外国人を語るとき、彼の存在は大きい。

飛鳥田市長の調査以後二十数年の間、ジェラ

ールについては本格的な調査は行われなかった。

その後、日仏関係の研究者の中にもジェラールに関心を持ち、研究発表もなされるようになった。ジェラール研究で一番最後に登場したのが研究者であろう。その一人が横浜港に入港した船舶を詳細に調査している敬愛大学の沢護教授であり、入港・出航の記録や英字新聞<sup>6)</sup>などを調べ、またその中の広告に注目してジェラールを調べた。この時点ではまだジェラールの生没年などは明らかになっていなかったため沢護教授もジェラールの生没年が分かれば研究(「アルフレッド・ジェラール 横浜に於ける水屋・瓦屋」(『横浜居留地のフランス社会』pp. 223-69, 平成10年3月敬愛大学経済文化研究所刊行)も格段に進展すると書いている。しかし、残念ながら、数年前に開港資料館によってジェラールの生没年などが判明したことは沢教授の目に触れることはなかった。このように刊本に発表された報告などが研究者の目に触れないことはしばしばみられる。日本側の研究では沢氏のそれががもっとも詳しい。

さて、筆者も日仏交渉史を研究テーマにしていることからジェラールについても当然関心があったが、なにしろほとんど経歴がつかめないので市民講座<sup>7)</sup>や大学の講義の時に技術導入の問題としてほんの少し言及したり、1991年の横浜日仏学院発行の新聞『ヨコラマ新聞』<sup>8)</sup>(3号)に「横浜とフランス(3)アルフレッド・ジェラールと横浜の建築 レンガ・カワラ」を書いた程度であった。その内容はもっぱらカワラやレンガについてであった。しかし、レンガやカワラを元町公園で見つけだしたのは、20年以上も前のことで、その頃、公園も整備されていなかったこともあり、あちこちにカワラのかげらが露出していた。その中に、レンガも出てきた。残念ながら、それは完全なものではなかったが、ジェラールと読みとれる文字が刻まれていた。私が所有しているのはレンガはこれが唯一のものであった。その後レンガは出てこない。元町公園のどこかに横浜の歴史を

語る貴重な資料は眠っているに違いない。昨年から今年にかけてジェラールのカワラ・レンガ工場跡を含め付近を横浜市が大改修しているので多分カワラ・レンガが出てきたものと考えられる。

## (2) ジェラール資料発見のきっかけ

ところが全くの偶然から横浜開港資料館の学芸員が地券等の史料を当時の神奈川県立文化資料館で調べている時にジェラール関係の記事が見つかったのである<sup>9)</sup>。

そこから待望のジェラールの出生地と死亡地を示す資料が出てきた。この点について開港資料館の努力を多としたい。ついに謎の人物の一部が明らかとなった。それによるとジェラールは1837年3月23日にフランスのランス(Rheims:ただしジェラールが出生した当時はRheimsと書かれている。シャンパーニュ地方のマルヌ県(Marne)の県庁所在地)に生まれた。ランスは画家の藤田嗣治<sup>10)</sup>が描いた壁画で知られている町である。両親はパン屋を営んでいた。帰国後のことはあまり分からないが1915年3月19日にランスで死去した。それは第一次世界大戦のさなかであった。

## (3) 出生

ランスの資料館に保存されているジェラールの出生届証書(acte de décès)は次の通りである<sup>11)</sup>。

L'an mil huit cent trente-sept, le vingt-cinq mars trois heures après-midi;par devant nous. Maire de la Ville de Rheims, officier de l'Etat-civil;est convenu le Sieur Jean Nicolas-Joseph Gérard, âgé de vingt-cinq ans, Boulanger, demeurant à Rheims, rue comte d'Artois \* No 13, lequel nous a présenté un enfant du sexe masculin, né en sa demeure;avant-hier vingt-trois mars à onze heures du soir, de lui, déclarant et de Dame Thérèse Lambert Chérury, âgée de vingt-trois ans, son épouse, et auquel enfant il a

donné le prénom d'Alfred. Cette déclaration a été faite en présence de Sieur Nicolas Gérard, âgé de cinquante-un ans, Cultivateur demeurant à Bezannes (Marne) aïeul paternel de l'enfant; et Jean Marie Mitouart, âgé de vingt-sept ans, Charcutier à Rheims, rue die Vesle No 120. Le père et les témoins ont signé avec nous après lecture faite.

Gérard Chéruy Gérard Mitouart

1837年3月25日午後三時、ランス市長、戸籍担当官は、ジャン・ニコラ・ジョゼフ・ジェラルム、25歳、パン屋と妻のテレーズ・ランベール・シェリュイ、23歳、ランス市コント・ダルトア通り13番地在住が当局に、自宅において一昨日の3月23日午後11時に出生のアルフレッドと名付けた男児を紹介し、ランス在住で男児の父方の祖父ニコラ・ジェラルム、51歳、農業とジャン・マリー・ミトゥアール、27歳、農業、ディヴェルス通り120番地、の立ち会いのもとで届け出がなされ、証人全員が、証書の朗読の後署名した。

ジェラルム・シェリュイ

ジェラルム・ミトゥアール

(Rue D'Artois は現在は Rue Voltaireとなっている。)

横浜開港資料館が出生地のフランスのランス市に問い合わせた結果、ジェラルムの出生記録と死亡記録を始め若干のジェラルムの来歴を示す資料が同館に送られてきた。そのことについては開港資料館の『開港のひろば』(39号、平成4年10月31日)にいきさつが書かれている。こうしてジェラルムは再び横浜で脚光を浴びることとなった。開港資料館の調査に感謝したい。このように偶然から大きな結果が得られる例は研究の分野を問わず多く見られる。

開港資料館が直接ランスでの現地調査をしていないようなので、筆者はランスに出かけた。戸籍関係は市役所<sup>12)</sup>や公文書館でコピーや複写ができたほか、ジェラルムの生家は通り

の名前が変わったこともわかったものの戦後の区画整理などで結局確認できなかった。当時のランスは連日ドイツの爆撃にさらされていたのである。

来日したフランス人の子孫を捜す手段に筆者は電話帳をしばしば使う。たとえば、この方法で成功した一例に東京帝国大学のお雇いフランス人教師のエミール・エック (Emile Heck, 1860-1943)<sup>13)</sup>がある。生家のあるダンジュタン (Danjoutan)<sup>14)</sup>という村には子孫が何人もいたのである。そこから一つの結果が生まれた。そのようなわけで今回も電話帳を調べたがジェラルムと言う姓はなかった。父親がパン屋であったので職業別でも調べたが、やはり同じだった。ジェラルムという姓はそれほど特別ではないのでここで子孫の調査は行き詰まってしまった。

平成4年の時点では開港資料館もジェラルムの墓所までは資料を入手してなかったようである。開港資料館が墓所の写真を公表したのが平成7年11月の館報第50号であった<sup>15)</sup>。

それならば次は墓地ということで、フランスへ行くことにした。まずランス駅に近い北墓地へ出向いた。そこにも無かったが、管理事務所の吏員が親切で南墓地に問い合わせしてくれた。すると南墓地にあったというのである。しかし、北墓地<sup>16)</sup>の管理人の電話での問い合わせに、南墓地<sup>17)</sup>の管理事務所は戦時下だったこともあり、地下墓地にあったが今はないということであった。その足で南墓地までタクシーを飛ばし、とりあえず管理人に来訪の目的を告げ名刺を渡してきた。ランス市には彼の墓所がなかったである。筆者が開港資料館から墓所の場所を知ったのは1997年で、墓所がわかるにはまだ若干時間が必要であった。それからジェラルムの調査が大きく動き出した。

#### (4) ジェラルムのプロフィールとフランスでの評価

ジェラルムのプロフィールは、そしてジェラ

ールの評価は故郷ランスではどのようなものであろうか。

フランスではジェラルールは「並外れた人」「冒険家」「事業家」「発明家」「建築家」「収集家」「寄進家」と評価されていた。帰国後ジェラルールは、農業発展に大きな貢献をしていることがわかった。ジェラルール祭の宣伝のパンフレット<sup>18)</sup>には写真とともに次のように書かれている。

L'Association vivre à Bezannes et la Municipalité de Bezannes

dans le cadre

de la journée du patrimoine 1997

et de l'année du Japon

à la découverte d'Alfred Gérard

HOMME D'EXCEPTION

HOMME D'AVENTURE

HOMME D'AFFAIRES

INVENTEUR

BATISSEUR

COLLECTIONNEUR

GENEREUX DONATEUR

これにより、日本での評価とかなり異なる面があるのに気がつく。日本ではもっぱら横浜港内の輸入商、肉屋（屠殺業？）<sup>19)</sup>、船舶用飲料水の販売、レンガ・カワラ工場経営といった企業家という評価である。地元ランスではジェラルールの評価は日本でのそれより大きい。これからの研究はそれらを合わせたものでなければならぬであろう。

地元で地域の発展のために活躍しているブザンヌ在住で地域の発展や環境保持のために尽力しているユゲット・ギュヤール夫人（Madame Huguette Guyard）から入手した資料では、ジェラルールはかなり前からその名が知られていた。それはジェラルールが町のため金銭を含む大きな貢献をしていたからであった。『Almanach』<sup>20)</sup>によると、彼は『博愛家』としてランスで高

く評価されている。これは、ウジェーヌ・デュポン<sup>21)</sup>が1931年に寄稿したもので、ジェラルールの晩年や最期の時がかなり詳しく述べられている。

これは、ジェラルールの死後15年程たって書かれたもので、ジェラルールに注目した最初の基本的な文献の一つともなっている。

ジェラルールのプロフィールは、写真でも有る程度分かるのだが、デュポンによると「体つきはがっしりとしていて、丸顔で大司教のような髭をたくわえている」<sup>22)</sup>。

彼が死後、遺言でランスの農業会館（センター）設立の資金を出したことが最初に書かれている。それによると<sup>23)</sup>、1930年にジェラルールはランス地方の農業のために設立されたこの農業会館は開館した。これは我々が全く知らなかったジェラルールの一面である。農業の振興はこの地方では最重要の課題であり、ジェラルールの資金提供は大きな力となったと考えられる。

戦時中は、生涯独身であったジェラルールは老人ホームに入り、そこで連日のドイツ軍機による爆弾の嵐と戦っていた。地下の生活はジェラルールに大きな負担となったはずだが、ジェラルールはかなり超然としていたそうである。しかし、爆撃の騒音がかれを疲労させ、落ち込ませた。

#### (5) ジェラルールの墓所

そうこうしているうちに、平成7年に横浜開港資料館が『開港のひろば』（50号）でジェラルールの墓地の写真を発表した。奇妙なことに鳥居が墓の前にあった。しかしその場所は書かれていなかった。横浜開港資料館の学芸員中武香奈美さんから教えられた場所（Bezan）をたよりに調べると、それがブザンヌ（Bezannes）と分かった。ランス市にはブザンヌ通りがあり、そこに墓地があるので、出かけると、管理人は台帳を見て、ここには無いとのことであった。その時、親切な管理人が墓はブザンヌ通りではなくブザンヌ町の方の墓地ではないかと言われ

た時、一時消えかけていた期待が再び膨らんだ。タクシーを呼んでもらい5・6キロ離れたところにある墓地まで急いだ。小さな町ブザンヌを過ぎ町外れのそれほど大きくない墓地に近づくと、車の中から大きな鳥居が見えたのですぐ分かった。私が最初にジェラルドの墓にお参りした日本人かもしれないと思ううれしかった。墓地の入り口の門には鍵がかけられていなかったの、中に入り、写真を何枚もとった。ジェラルドの墓は墓地に入って左の奥にあり、石づくりの大きな鳥居が前にある。向かって右に石灯籠がひとつ、左に石灯籠が2つあった。墓石の全面に墓誌があり、「アルフレッド ジェラルド 1837-1915」とのみ書かれている。ジェラルドの死亡証書やこの墓石や死亡証書を見るとジェラルドは生涯独身であった。帰りにタクシーの運転手にもジェラルドや横浜のことをやや興奮気味に私は話した。ここまでたどり着くにはなんと多くの時間と人が必要であったことか。飛鳥田市長を始め開港資料館、それに各墓地の管理人には感謝の気持ちでいっぱいである。

#### (6) ジェラルド墓前祭<sup>24)</sup>

1997年の一月の末にブザンヌ町在住でジェラルドについて研究しているユゲット・ギュアール夫人から一通の手紙が届いた。そこにはブザンヌ町がジェラルドの記念式典を9月21日に行うので、できたら参加してほしいと書かれていた。早速承諾の返事をギュアール夫人に書いた。なぜこちらの住所がわかったかと聞くと、ランス市の墓地の管理人が私の事を記憶していてギュアール夫人に連絡したからとのことであった。これも偶然が幸運を呼んだと言える。

会場には町の人が大人から子供まで100人以上集まって来た。その中にはこれまでよく分からなかったジェラルド家の子孫も来ていた。町役場のベルフィー町長<sup>25)</sup>の話をはじめ当地の著名人の挨拶とジェラルドの功績を讃える話が

長い間続いた。最後になって筆者が紹介され20分ほどジェラルドと横浜について話をした。野外の会場では資料がパネルで展示されていた。横浜から持参したレンガとカワラの写真、それにジェラルドの工場のエッチングのコピーとマルセイユのピエール・クレットマン家<sup>26)</sup>で見つけたジェラルドの若い頃の写真もその展示に加わられた。ジェラルドのこの写真は1996年の『日仏文化交流写真集』(第三集)(駿河台出版社)に第2次フランス軍事顧問団のルイ・クレットマンやクレットマンの同僚並びに、家族の写真とともにクレットマン家のご好意で掲載したものであったが、ブザンヌではまだこの写真の存在を知っていなかった。2000年2月9日から4月30日まで開催された開港資料館の「フランス士官が見た明治のニッポン-L. クレットマン・コレクションから」展にもジェラルドの写真がクレットマンの写真とともに展示された。こうしてジェラルドの日本時代の写真と晩年の写真がそろったのであった。また平成2000年2月の『広報よこはま』の『なか区版』にも「ジェラルドの肖像写真、発見される!」と題して開港資料館の中武さんが紹介している。

今まさにジェラルドはランス市とブザンヌ町の名士となった。この年はちょうど「フランスの日本年」でもあり日仏交流のイベントとしてまことにふさわしい「ジェラルド墓前祭」になった。

ジェラルド墓前祭の記事がランス地方の新聞「リュニオン」(L'Union)に2度<sup>27)</sup>、ブザンヌ町の月報「ラ・ガゼット・ド・ブザンヌ」(La Gazette de Bezannes)に1度<sup>28)</sup>、月刊誌「ディストリクト」(District)に1度<sup>29)</sup>掲載され、私はジェラルドに対する地元の関心の高いことを実感した。これまではあまり大きく取り上げられることはなかったジェラルドが、今では町興しの起爆剤にもなっているのである。

飛鳥田市長は、レンガ・カワラのジェラルド、肉屋のジェラルド、横須賀製鉄所お雇いのジェラルド、井戸掘りジェラルド(水屋)、建築家

ジェラルールと挙げて、お雇いと建築家のジェラルールは別人と判定しているが、私の考えでは建築家のジェラルールは私たちが求めている人物かと思う。その根拠は決定的なものではないが横浜にいた時代が同じということと建築家ということからである。A. GERARDという名前は外国人の下船名簿を詳しく調べても幕末期、それも開国まもない頃に何人も来ているとは思えない。

#### (7) ジェラルールの来日年

英字新聞の広告で見る限りジェラルールの来日は1864年が有力であろう。ブザンヌのジェラルール研究家のギヤール夫人によれば、ジェラルールの来日は1858年である<sup>30)</sup>。ギヤール夫人は旅行許可証の番号などを根拠にしているが、実物を見てないので、それがどのようなものか不明である。

ジェラルールは、広告を出す1864年までに来日しているわけだから、1863年説も十分可能性がある。それを解明するには、もう少し時間が必要であろう。

また、私の知る限り、飛鳥田氏がいう横須賀製鉄所のジェラルールはジラルール、つまりヴィクトル・ルイ・ジラルール (Victor Louis Girard) で技師<sup>31)</sup>であり、まったくの別人である。

横浜港に着いた船の下船者名簿がこの時代は不完全なので、今でも特定できないでいる。調べたところ、1864年にはジェラルールが英国語新聞「ザ ジャパン ヘラルド」(The Japan Herald)<sup>32)</sup>に「FOR SALE 100 bbls, Best American Flour, 100 cases Champagne, Lyons Sausage, Biscuits Glacés」や、さらに「150 doz. Breakfast Winés」を加えた別の広告を出しているので1864年は来日していることは間違い無い。

#### (8) 来日の目的

広告を見て分かるように、彼はフランス製品の売り込みを目的に来日したと考えてよいのではなからうか。この店は168番地にあり、さら

に興味深いのは同じ番地の広告で「French Bakery behind the Grand Café au Japon」<sup>33)</sup>が出ている。ジェラルールは横浜で一時パン屋を開業していた可能性が出てくる。生家がパン屋であったことを考えると十分納得がいく。このパン屋については敬愛大学の沢護氏以外、新聞の広告記事に気がつかなかったので言及されたことは多分これまでない。私がそれに気付いたのも数年前のことである。

ただ、ジェラルールが来日するにあたっての高額の費用は誰が出したのか、日本のことをどうして知ったのか、など謎も多い。ジェラルールと日本を結びつける接点は依然として特定できない。商売をするにしても、元手が必要なのでそれを解明することがとりわけ必要である。企業家ジェラルールの謎はまだまだ解けない。

また、カワラやレンガを製造するには、それなりの経験が必要なので、これもまた謎のひとつである。

それにしても、商売を次から次へと変えていったジェラルールのエネルギーには驚かされる。

#### (9) ジェラルール・カワラの建築物

現在でもまだジェラルールのカワラを使用している建物が逗子にもあるようだが、筆者はまだ見ていない。12年ほど前に、中区根岸の大久保家<sup>34)</sup>のカワラが葺き替えられたとき、数枚入手できたが、それらは明治初期のカワラではなく、1887年と1889年のものであった。しかも英語でGerard's...という刻印があった。そのときは新聞にも報道されたほかNHKでも吹き替えの模様を放映した。

『横浜銅板画』の解説<sup>35)</sup>によるとジェラルールのカワラが使用されていた建物は中区小港ワシン坂下の古い民家、緑区荏田町の徳江家の納屋、ゲート座 (中区山手の港の見える丘公園と外人墓地の間。現在は復元されている)、葉山町堀内平山ホテル、三浦市三崎城ヶ島浄光寺、千葉県佐倉の佐倉連隊記念碑、それに皇居内の一部とのことである。

昭和57年に出た『横浜銅板画』<sup>36)</sup>にジェラルムの工場が2枚掲載されている。その一枚には「GERARD'S STEAM TILE AND BRICK WORKS, No 77 BLUFF OR MOTOMACHI」(横浜元町山七十七番 煉瓦瓦石製造所 エー, ゼラルド), もう一枚には「A GERARD'S NAVY WATER WORK'S THE SOFTEST SPRING WATER, IN YOKOHAMA No 77 BLUFF OR MOTOMACHI」(横浜元町山七十七番 船用上飲用水販売所 エー, ゼラルド)と書かれている。この説明のある建物には「A. GERARD'S STEAM TILE AND BRICK WORKS」とあり, 説明と工場の絵とは合わない。ジェラルムが蒸気力を使用して大量に製造していたことがわかるが, その設備投資に要した費用はかなりのものであったにちがいない。共同経営者がいたのであろうか。

工場内に置かているのは, レンガ, カワラのほかにレンガではあるが穴空きのものもある。その穴は2個, 3個, 4個となっている。これなどは現在のブロックのようなもので, その先駆けの製品といえるかもしれない。筆者が入手できたものは2個と3個の穴空きレンガであるが, ジェラルムの名前などは一切ない。これがジェラルムの製造したものかどうかは, 土を分析すれば簡単にわかるはずである。

現在の地図ではこのあたりは元町であるが, 英語でBluff or Motomachiと書かれているところから山手と元町の境界線を跨いで工場が建てられていたというのが結論である。

#### (10) ジェラルム日本コレクション

ジェラルムは, ラーンズ市に, 2400点以上の日本滞在中に収集したの物を寄贈した。現在これらはサン・レミ美術館 (Saint-Rémi)<sup>37)</sup>に収蔵されている。もっとも, その中には帰国後パリで収集したものや中国, 朝鮮のものが混在しているらしい。これらの品物の整理ができるのを待って, 町がジェラルムに関する大きな展示会を10月以降に計画しているようである。そう

すれば, ジェラルムが日本から持ち帰った収集品の全貌が明らかとなるであろう。

これは異文化に直接触れたジェラルムのカルチャーショックの大きさを示している。

これまでに分かっているのは, 大ざっぱに言って次のようなものである。このほどサンレミ美術館の好意で入手したリストを分類すると実に種類が多い。残念ながらサン・レミ美術館の収集品を直接見る許可は出なかったが, 多分その理由は, まだ未整理で雑然と置かれているからかもしれない。その証拠に, 同美術館が見せてくれた2枚の写真はジェラルムの日本土産が所狭しと置かれていて, まるで倉庫のようであった。そこには額や仏像などをはっきり見ることができた。一日も早い展示会の開催が待たれる。外国人が日本の文化に触れて驚いた様子が垣間見られる。美術館からいただいた品目のコピーは数十枚にもものぼるもので, 細かい寸法や推定年代も記載されている。

- (1) 武具 (兜・刀・銃)
- (2) 壺 (花瓶など)
- (3) 皿
- (4) 掛け軸
- (5) 版画
- (5) 水彩画
- 8冊
- (6) 楽器
- (9) 時計
- (10) 衣類
- (11) 古銭 (約900枚)
- (12) 金貨 (2枚)
- (13) 地図
- (14) キセル
- (15) 扇子
- (16) 能面

フランス人がとりわけ興味を持ったのは, これらの日本の文化であり, ラーンズで過去に2度展示会が開催された。10月にも開催される予定の展示会は日本とフランスをいっそう強く結びつける強い絆となるであろう。

飛鳥田市長が1974年にジェラルムのことを書いてから26年たった今, じつに様々なことが多くの人びとの協力で明らかとなってきた。

以下品目の詳細なリスト<sup>38)</sup>のほんの一部を紹介する。

622) Bouddha, bronze (1720×760×760)

623) Bouddha, bronze doré, XVIe (1145×350×

- 310))
- 624) Lanterne, bronze doré (470×430×415)
- 625) Lanterne, bronze doré, XVIe (470×430×415)
- 626) Lanterne, bronze, XVIIIe (1450×450×450)
- 627) Lanterne, bronze, XVIIIe (1200×450×450)
- 628) Fontaine, bronze, XIXe (441×432×379)
- 629) Jardinière, bronze, XIXe (151×582×255)
- 630) Chimère, bronze, XIXe (76×18×13)
- 631) Coupe à trois pieds, XIXe (224×233×215)
- 632) Grenouille et Serpent, bronze, XIXe (76×222×120)
- 633) Langouste, bronze, XIXe (167×260×366)
- 634) Vase, bronze, XIXe (295×312×312)
- 635) Vase, bronze, vieilli d'argent, XIX (275×130×127)
- 636) Crues, bronze, XIXe (413×520×193)
- 637) Jardinière, bronze, XIXe (151×522×290)
- 638) Corbeille, bronze, XIXe (63×125×72)
- 639) Corbeille, bronze, XIXe (63×125×72)
- 640) Corbeille, bronze, XIXe (63×125×72)
- 641) Corbeille, bronze, XIXe (63×125×72)
- 642) Corbeille, bronze, XIXe (63×125×72)
- 643) Cloche, bronze, XVIIIe (?) (371×220×220)
- 644) Jardinière, bronze, XIXe (173×422×302)
- 645) Porte-bouquet, bronze, XIXe (192×110×90)
- 646) Porte-bouquet, bronze, XIXe (192×110×90)
- 647) Brûle-parfum, bronze, XIXe (326×240×205)
- 648) Vase, bronze, XIXe (354×335×334)
- 649) Porte-bouquet, bronze, XIXe (265×150×150)
- 650) Brasero, bronze, XVIIe-XVIIIe (143×215×215)
- 651) Porte-bouquet, bronze, XIXe (245×142×142)
- 652) Porte-bouquet, bronze, XIXe (245×142×142)
- 653) Brûle-parfum, bronze, XIXe (145×150×105)
- 654) Vase, bronze, XIXe (210×260×235) :Imit. japonaise d'un modèle chinois
- 655) Porte-bouquet, bronze, XIXe (200×120×120)
- 656) Porte-bouquet, bronze, XIXe (200×120×120)
- 657) Grue, bronze, XIXe (55×96×72)
- 658) Carpe, bronze, XIXe (556×292×170)
- 659) Petite tortue sur une feuille, bronze, XIXe (42×110×71)
- 660) Brûle-parfum, bronze, XIXe (260×315×210)
- 661) Presse-papier, bronze, XIXe (83×215×105)
- 662) Ecritoire portatif, bronze, XIXe (65×68×58)
- 663) Presse-papier, bronze, XIXe (19×69×45)
- 664) Porte-bouquet, bronze, XIXe (152×82×82)
- 665) Porte-bouquet, bronze, XIXe (152×82×82)
- 666) Maisonette, bronze, XIXe (140×85×67)
- 667) Théière, bronze, XIXe (136×136×125)
- 668) Porte-bouquet, bronze, XIXe (268×172×172)
- 669) Porte-bouquet, bronze, XIXe (268×17×172)
- 670) Vide-poche, bronze, XIXe (268×170×120)
- 671) Porte-bouquet, bronze, XIXe (235×120×120)
- 672) Théière, bronze, XIXe (136×136×125)
- 673) Vase, bronze, XIXe (272×155×155)
- 674) Vase, bronze, XIXe (272×155×155)
- 675) Embarcation, laiton, (125×232×130)
- 676) Nécessaire de toilettes, 6 pièces, laiton et acier, (encombrement 195×23)
- 677) Nécessaire de toilettes, 6 pièces, laiton et acier (encombrement 195×28)
- 678) Amphore, bronze, XIXe (250×89×89)
- 679) Porte-fleurs, bronze, XIXe (270×290×290)



- 680) Faucon, bronze, XVIIe (216×176×102)
- 681) Coupe, bronze, XIXe (145×140×140)
- 682) Coupe, bronze, XIXe (145×140×140)
- 683) Crabe, bronze, XIXe (102×296×160)
- 684) Brûle-parfum, bronze, XIXe (192×185×105)
- 685) Vase, bronze, XIXe (165×105×95)
- 686) Brûle-parfum, bronze, XIXe (365×245×245)
- 687) Vase, bronze, XIXe (225/95/95)
- 688) Groupe de 3 grues, bronze, XIXe (412×346×190)
- 689) Papillon, bronze, XIXe (240×416×290)
- 690) Mortier, bronze, XIXe (?) (160×283×251)
- 691) Grue, bronze, XIXe (985×655×165)
- 692) Chaîne, bronze, XVIIIe (2050×45×33)
- 693) Bouddha, bronze, XIXe (491×315×306)
- 694) Coloquine, bronze, XIXe (136×61×55)
- 695) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 696) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 697) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 698) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 699) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 700) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 701) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 702) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 703) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 704) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 705) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 706) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 707) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 708) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 709) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 710) Applique, bronze, XIXe (45×273×273)
- 711) Vase, bronze, XVIIe-XIIIe (117×303×300)
- 712) Grue sur une feuille, bronze, -fin XVIIe (416×215×138)
- 713) Vase hexagonal à pied, bronze, XIXe (194×305×271)
- 714) Vase, bronze, XIXe (110×57×56)
- 715) Cendrier en forme de feuille, bronze, XIXe (51×140×87)
- 716) Petit plateau, bronze nielle, XIXe (12×273×195)
- 717) Horloge, cuivre, bois, verre XIXe, imitation Hollande (866×235×242)
- 718) Horloge, bronze et bois, XIXe (701×240×240)
- 719) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (1605-1868) (351/232×116)
- 720) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (371×160×115)
- 721) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (360×166×127)
- 722) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (372×165×115)
- 723) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (361×172×124)
- 724) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (361×166×114)
- 725) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (365×164×119)
- 726) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (365×168×115)
- 727) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (367×165×116)
- 728) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (360×165×120)
- 729) Statuette, ambassadeur du Liou-Chou, terre cuite, période EDO (360×165×120)
- 730) Saladier, faïence décorée (125×310×310)
- 731) Cerf, terre cuite émaillée, XIXe (186×245×140)
- 732) Applique, faïence décorée, XIXe (78×84×84)
- 733) Brasero, terre cuite émaillée (250×225×225)
- 734) Saladier, faïence décorée (130×310×310)
- 735) Plat creux, faïence décorée (68×356×356)

- 736) Jatte, faïence décorée (82×270×268)  
 737) Service à thé: 4 tasses et soucoupes -t. ;36×58×58-s. :21×106×104, porcelaine decore  
 738) Bouteille à saké, porcelaine décorée (150×55×55)  
 739) Ravier, terre cuite émaillée, XIXe (44×215×216)  
 740) Théière, porcelaine décorée (131×144×75)  
 741) Plat, faïence décorée (35×280×197)  
 742) Théière, porcelaine décorée (125×153×105)  
 743) Série de 3 jardinières emboitables, faïence décorée (95×197×180-85×186×162-82×166×144)  
 744) Service à thé: 4 tasses, faïence décorée (24×35×34)  
 745) Potiche, terre cuite émaillée, XIXe (85×117×117)  
 746) Service à thé: 5 tasses, grès décoré, XIXe (40×65×64)  
 747) Service à thé: 4 tasses, faïence décorée, XIXe (50×66×66)  
 748) Cerf, terre cuite émaillée, XIXe (110×175×175)  
 749) Bouteille à saké, faïence décorée (158×64×64)  
 750) Service à thé: 5 tasses, grès décoré, XIX (41×65×63)  
 751) Vide-poche, faïence (91×97×97)  
 752) Vide-poche, faïence (91×97×97)  
 753) Cigogne, terre cuite (322×200×146)  
 754) Théière, faïence décorée (200×175×127)  
 755) Bouteille à saké, porcelaine décorée (360×85×85)  
 756) Jatte, faïence décorée (83×325×325)  
 757) Théière, terre cuite (115×160×96)  
 758) Vase, faïence décorée, KIOTO (525×290×265)  
 759) Vase, faïence décorée, KIOTO (525×290×265)

- 760) Ravier, faïence décorée (22×195×168)  
 761) Ravier, faïence décorée (32×195×168)  
 762) Serie de 3 ravier, faïence décorée (35×188×131)  
 763) Vase, faïence décorée (465×252×213)  
 764) Vase, faïence décorée (465×252×213)

#### (11) ジェラルールの死

横浜を中心に西洋建築資材供給に大きく寄与したアルフレッド・ジェラルールは1915年のヨーロッパ大戦のさなかに死去した。戦争中のことで最初、彼の遺体はランスの南墓地の地下に埋葬されたが、後にそこから5・6キロ離れたブザンヌの町営墓地に移葬された。

デュポンは、農業会館の図書室の司書であったフェリックス・ピルトン<sup>39)</sup> からパリの友人に届いた手紙を紹介している。それによると、ジェラルールは苦しむことなく、また当時の状況を知ることなく病院となっていた老人ホームの地下で息を引き取ったようである<sup>40)</sup>。彼の棺は一時的に南墓地に埋葬されたが、遺書により後にブザンヌの墓地に移葬された。

埋葬の間もドイツ軍機が大教会堂の上に飛来し空中戦が行われた。悲しいことに出席者は20人ほどであった。それでもこの時期では慰められた。ジェラルールが死んで心にぽっかり穴が空いたようだった。

ジェラルールの死亡証書 (acte de décès) には次のように記載されている<sup>41)</sup>。

Le dix-neuf mars mil neuf cent quinze à quatre heures du matin, est décédé en son domicile, Alfred Gérard, né à Reims le vingt-trois mars mil huit cent trente-sept, rentier, domicilié à Reims, rue Simon 26, fils de Jean Nicolas Joseph Gérard, et de Thérèse Lambert Chéruy, son épouse décédés;célibataire,

Dressé le dix-neuf courant, onze heures du matin, sur la déclaration d'Edouard Alexandre Caniot, quarante-deux ans et d'Alfred Adam, quarante-neuf

ans, employés, domiciliés a Reims, qui lecture faite, ont signé Nous, Jean-Baptiste Nicaise Langlet, Maire de Reims, Chevalier de la Légion d'Honneur.

1915年3月19日午前9時、自宅において、シモン通り26番地に居住の故ジャン・ニコラ・ジョゼフ・ジェラルド並びに妻の故テレーズ・ランベール・シェリュイの嫡子で1837年3月23日にランスに生まれたアルフレッド・ジェラルド、独身が死去した。

本月19日の午前11時に証書作成、エドアール・アレクサンド・カニオ、42歳とアルフレッド・アダン、49歳、会社員、ランス在住の申し出について市長ジャン・バチスト・ニケーズ、レジオン・ドヌール・シュヴァリエ章受賞、他全員が署名した。

## (12) あとがき

ジェラルド関係の資料を提供していただいたランス市のサン・レミ教会の資料館ならびにジェラルド調査のきっかけを与えていただいた横浜開港資料館に心より感謝する。また、ブザンヌ町のギュヤール夫人、ブザンヌ町長の調査協力についても同じく感謝する。今後は、フランスと日本の協力により更なる進展があることを期待したい。ギュヤール夫人からもジェラルドについての調査研究を一応完了したとの書簡が届いた。10月にジェラルドの3回目の資料展示会がサン・レミ教会の資料館で開催されると聞いたが、予算の関係でいまだ実現していない。それをきっかけにジェラルドの全体像がさらに明らかにされるに違いない。

## 注

- 1) 中区尾上町(馬車道)の指路教会(Shiro Church: プロテスタント)
- 2) 中区山手のゲーテ座(Theater of Gaiety: 7月14日のフランス革命記念日にはオペラなどを上演していた現在は岩崎学園が復元)
- 3) 中区のライト・ホテル(Wright Hotel)など
- 4) 飛鳥一雄(1915-1990)=アスカタ イチオ、弁護士、横浜市長、日本社会党委員長など歴任

- 5) 昭和49年12月20日に『素人談義三人ジェラルド』(本文193頁)発行。内容は「野毛山の散歩道」など40編集録。これらは『日本経済新聞』『文芸春秋』『婦人公論』『朝日ジャーナル』などに掲載されたものをベースにしている。
- 6) 『The Japan Times』『Japan Gazette』『The Japan Weekly Mail』『The Daily Japan Herald』特に『The Weekly Mail』の出船・入船の記録は乗船者名簿もあり、外国人や日本人の調査に貴重な資料となっている。また、外国語の新聞に掲載されている広告も当時の様子を知る上で欠かせない資料といえる。
- 7) 横浜市の教育委員会等が毎年企画している生涯教育のための講座で、多いときには120もあったと聞く。ほとんどが有料であるが希望者は定員を越える場合が多い。たとえば、1999年1月開講の「教文セミナー」は1月13日から3月31日まで開催され、週一回または週2回で31講座であった。「横浜とフランス-出会いと交流-」のプログラムは次の通り。①日本とフランス-出会いと交流(西堀)②第1次フランス軍事顧問団(滑川)③横浜フランス語学所(西堀)④横浜製鉄所と横須賀製鉄所(西堀)⑤フランス瓦・レンガとジェラルド(西堀)⑥ガス灯とベルグラン(西堀)⑦横浜の西洋建築とサルダ(西堀)⑧リヨンと横浜-ポール・ブリユナ(西堀)⑨サン・モール修道院と横浜-マチルド(西堀)⑩外人墓地に眠るフランス人(西堀)
- 8) 10年前に東京の日仏学院の横浜校舎として設立したフランス政府の公式教育機関。現在61講座あり、約600人が在籍。2000年4月21日(金)にフランス大使モーリス・グルドー・モンターニュ(Maurice Gourdault-Montagne)氏を主賓に迎え10周年式典を関内ホールで開催。初代院長フランシス・メジエール(Francis Maiziales)氏が、機関紙として『ヨコラマ新聞』を発行した。院長の転任で15号で廃刊。
- 9) 横浜開港資料館の機関紙で毎月発行。とりわけ開国期の横浜市関係の対外資料の紹介。平成4年10月31日号の『開港のひろば』(YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY)の『横浜の外国人居留地』展によせてジェラルドの出生・死亡証明書による。「神奈川県立文化資料館が所蔵する県庁各課文書中に横浜居留地関係の基本資料の一つ、永代借地権に関する知事官房外務文書がある。関東大震災で消失した地券の再発行、境界線の再確定に関する記録をはじめとして、大

正期以降の地券の譲渡記録などが綴られている。これまで本格的に使われたことがなく、今夏、展示準備のため担当者三名が悉皆調査を行ったところ、かなりの地券所有者を明治期まで遡ることができた。また、地券の現物（明治13年発行）も発見した。そしてジェラルルの名を見出し出したのもこの文書中であった。以下略（中武香奈美）。このように研究分野を問わず偶然が大きな結果につながる例は数多くある。

- 10) 藤田嗣治：フランスに帰化した洋画家でランスに滞在、ランス市の郊外にある藤田礼拝堂（Chapelle Fujita）の壁画は有名。藤田画伯自身も群衆の中の一人として描かれている。
- 11) ランス市文書館所蔵（複写不可、書き写しのみ可）
- 12) ランス市戸籍課所蔵（複写可能）。フランスでは戸籍謄本（抄本）類は、古いものは原則として外国人でも取得可能、ランス市の公文書館は、例外で書き写すことはできるがコピーは許可しない。このような例は小河織衣前明星大学教授によればサン・モール修道院も同様だそうである。
- 13) 先祖代々ベルフォール（Territoire de Belfort）県ダンジュータン（Danjoutan）にエック家があり、簡単に子孫を捜すことができた。ただし、日本政府の法律顧問のポアソナード家や海軍省の技術顧問のベルタン家の場合は、パリに子孫が居住していなかったため多くの時間が必要であった。前者は子孫が絶えて居る場合で、後者はパリに居住していなかった上に電話帳に氏名を掲載しない場合であった。
- 14) 生家の庭には卒業生から贈られた胸像が置かれている。暁星学園（Ecole de l'Etoile du Matin）の関係者も近年生家を訪れたことがある。ただし、文献のようなものは生家にはほとんどなく、金属製の箸と下駄が生家の近所の子孫の家にあっただけだった。
- 15) 「横浜人物小誌⑩ ジェラルル（1837-1915）故郷、ランスに錦を飾る」『横浜開港資料館報』平成7年11月1日。p.5
- 16) 北墓地（Cimetière du Nord）：18, Boulevard Dieu Lumière
- 17) 南墓地（Cimetière du Sud）：1 bis rue Champs de Mars
- 18) L'ASSOCIATION VIVRE A BEZANNES ET LA MUNICIPALITE DE BEZANNES dans le cadre de la JOURNEE DU PATRIMOINE et de l'ANNEE du

JAPON à la découverte d'Alfred Gérard Dimanche 21 septembre 1997 à 15 heures précises devant le cimetière du village de Bezannes Hommage à Alfred GERARD Visite de son Monument Funéraire Japonais

- 19) Butcher と書かれているので肉屋（『素人談義三人ジェラルル』p.177）とも屠殺業（『横浜銅版画』（p.257））ともとれる。
- 20) Almanach Matot-Rains 1931, pp.251-256（Guyard 夫人提供）
- 21) ウジェーヌ・デュボン（Eugène Dupont）=不詳
- 22) 前掲『年鑑』p.255 <C'était un homme robuste et de haute taille, le visage plein et fourni d'une barbe de patriarche.>
- 23) 前掲『年鑑』p.251 <Le 23 octobre dernier a été inauguré officiellement le Cercle Agricole Rémois que les libérés posthumes d'un enfant de Reims, Alfred Gérard.>
- 24) 当日の主な報告は次のようであった。

Les recherches sur Alfred GERARD ont été faites par Huguette GUYARD de VIVRE à Bezannes et Jean-Yves SUREAU de S.O.S. Reims. Les recherches généalogiques par Huguette GUYARD.

Monsieur Francis WALBAUM parla du CERCLE AGRICOLE REMOIS qui, fonctionne toujours et de la bibliothèque dont il est le responsable et pour laquelle il a d'intéressants projets, (qui furent créés par Alfred GERARD)

Le Musée SAINT REMI de REIMS avait adressé une liste des principaux objets d'art japonais, légués à la Ville de REIMS par Alfred GERARD.

Lorsque Monsieur Akira NISHIBORI, Professeur à la Faculté de Gestion et au Cours du Doctorat du Développement International de l'Université Nationale de YOKOHAMA, arrivé du JAPON le matin même, évoqua la présence et le rôle d'Alfred GERARD à YOKOHAMA

- 25) Monsieur Jean-Pierre Belfie, Maire de Bezannes
- 26) 第2次軍事顧問団のルイ・クレットマンについては全く知らなかったが、1993年に子孫の一人であるアンヌ・ロール・レーマン（Anne-Laure Lehman）さんからその存在を初めて知った。彼女が英語の教師として東京に来たとき、大使館か日仏会館で筆者の住所を聞き、面会を求めて来たのであった。そのときに、マルセイユのピエール・クレットマン家に多くの資料があることを聞いた。その後、クレットマン氏と連絡を

取った結果多くの写真が有ることが分かった。1993年にクレットマン氏、それに助手のような働きをしている梅田真美さんとマルセイユで会って写真を見せてもらったところ、ジェラルドの写真もその中にあった。クレットマン氏自身もその後『Deux ans au Japon』(Tome 1, 1995) 『Deux ans au Japon』(Tome 2, 1996) を自費出版した。これにはマルセイユ在住の留学生梅田真美さんが全面的に協力した。梅田さんなしにはクレットマンに光が当たることはなかったといえる。本書の日本での贈呈先をクレットマン氏から依頼されたので、開港資料館や日仏関係を研究している滑川明彦(日本大学教授)、市川慎一(早稲田大学教授)、沢護(敬愛大学教授)氏などを紹介した。こうしてクレットマン展が横浜の開港資料館で開催されるまでになった。

- 27) 『L'Union』(Journal de l'Union de Reims 29 septembre 1997)

(1)

Bezannes Un hommage à Alfred Gérard...Cet après-midi a été également marqué par un moment fort lorsque M.Akira Nishibori, professeur à la Faculté et à l'université de Yokohama, arrivé du Japon le matin même, a évoqué la présence et le rôle d'Alfred Gérard

(2)

Dimanche 21 septembre, le public est invité à découvrir ce monument en présence de M.Akira Nishibori qui se déplacera tout spécialement de Yokohama...

- 28) 『La Gazette de Bezannes』 Octobre 1997. No 161  
Lorsque Monsieur Akira NISHIBORI, professeur à la Faculté de Gestion et au Cours de Doctorat du Développement International de l'Université de Yokohama, arrivé du Japon le matin même, évoqua la présence et le rôle d'Alfred GERARD à YOKOHAMA

- 29) 『La District magazine』(La revue du district de Reims octobre 1997.No 41.pp.34-35.)

Un témoin venu du Japon.

Jean-Pierre Belfie a accueilli les invités en japonais, ce qui n'a pas manqué de détendre l'assistance et d'honorer Monsieur Nishibori, tout juste débarqué de 13 heures d'avion. Il a ensuite lu le testament d'Alfred Gérard au bénéfice de la Commune, ouvrant ainsi la reconstitution de sa vie. Monsieur Nishibori a reçu un portrait d'Alfred Gérard et une plaque gravée en souvenir de ce moment, après avoir les années

japonaises du personnage.

- 30) Nous savons qu'il est arrivé au JAPON en 1858 et qu'il y a fait du commerce de thé, puis d'eau de ses sources.
- 31) Victor Louis Girard: (鑄造頭目) (日本外務省外交史料館所蔵資料『Tableau du personnel de la Marine française attachée à l'Arsenal de la Marine impériale du Japon』)
- 32) 横浜開港資料館所蔵『THE DAILY JAPAN HERALD』(No 333 Nov, 24th, 1864)  
「FORSALE 100 casks best American Flour 100 cases Champagne, 150 doz. Breakfast Wines, 50 cases Lafitte, Lyon Sausage」(1865.6.29)
- 33) 「French Bakery behind the and Café au Japon 168 Bread delivered every morning」(1868.8.19)
- 34) 黒色一色で刻印はすべて英語で1889年の時代のものがあつた。その大部分は横浜市が譲り受けた。
- 35) 昭和57年12月5日発行で、巻末に開港前後の大きな商社などの紹介もある。スイス人生糸商バヴィエル(Bavier)などは今後の研究課題の一つとなろう。
- 36) ジェラルドに関する重要な資料。当時の工場が近代化(機械化)されているのが分かる。
- 37) この資料館はサン・レミ(Saint-Rémi)教会に隣接していて、古代からの当地の考古学的な資料まで網羅している。
- 38) 1999年の訪問時に入手したもので、克明な調査であることが分かる。その努力を多とする。ジェラルドによって日本文化の一部が後世に伝わったとも言える。このように外国に渡ったがために戦火を免れ、また地震等の災害から護られた。
- 39) フェリックス・ピルトン(Félix Pilton)は、農業会館の図書室の司書をしていた人物であることぐらいしかわかっていない。ただ、戦時下にジェラルドと行動を共にしていたことから、ジェラルドの帰国後の生活、特に晩年を知る上で重要な人物である。
- 40) 前掲『年鑑』pp.252-53
- 41) ラーンズ市役所戸籍課(Etat-Civil)提供。

〔にしほり あきら 横浜国立大学名誉教授〕